

標準語と沖縄の言葉



標準語	沖縄の言葉
ありがとう	にふえーでーびる
いただきます	くわっちーさびら
ごちそうさま	くわっちーさびたん
お願いします	うにげえさびら
おいしい	まーさいびーん
こんにちは	はいさい（男性）      はいたい（女性）
いらっしゃいませ	めんそーれ
元気	がんじゅー
ごめんください	ちゃーびらさい
友達	どうし
仲間	しんか
おつかれさま	たいみそーちー
わかりました	わかりやびたん
さようなら	ぐぶりーさびら

日常でよく使う言葉を沖縄の言葉で表現した場合、上の表のようになります。かけ離れているように見えますが、元々は同じ言葉でした。それが奈良時代のころに分かれたと言われており、独自に発展していきました。沖縄の方言は古い時代の日本語をもとにしているものが多いです。例えば、「めんそーれ」は「参（まへ）り候（そうら）え」が変化したものとされています。しかし近年、沖縄方言を使える人が少なくなり、平成二十一年には、ユネスコが、消滅の危機に瀕する言語に沖縄方言を指定しました。実際若年層ほど使えない状況が顕著なので、現在は方言の普及推進活動が行われています。

沖縄の民話

キジムナーの仕返し

ある夜、サバマイという漁師が漁をしていると、傍で同じように魚を獲っている人がいました。それからサバマイが夜遅く漁に出るたびに、その男がやってきて魚がよく獲れました。ところが男は自分の名も言わず顔も話し方も周りの人と違っていたので、サバマイは男が妖怪で人に化けているかと思いはじめました。このまま男と付き合うと悪いことが起こると考え、男の家をつきとめることにしました。

ある日、漁が終わるとサバマイは男のあとをつけ、大きなクワの木に吸い込まれるように姿を消すのを見て、男がキジムナーだということがわかりました。サバマイは妻に言い、クワの木を燃やしてしまいました。その日からその男は姿を消し、サバマイは妖怪を退治したと大喜びしました。

それから何年もの月日がたったある日、首里にいる幼馴染に会って酒を酌み交わすうちにサバマイは気が大きくなってきて、キジムナーの話を上機嫌で語り始めました。

話を聞いていた幼馴染の友達は急に怖い顔になって怒り出しました。サバマイが驚いてよく見ると、目の前にいるのは幼馴染の友達ではなく、あのキジムナーだったのです。キジムナーは持っていた小刀で、サバマイを切りつけました。サバマイは血を流しながら村へ帰り、苦しみながら死んでしまいました。キジムナーは人間に害を与えるところか、逆に幸福をもたらす生き物でした。しかし人間が裏切ったひどい仕打ちをしただけのとき、恐ろしい仕返しをするのです。

サバマイはキジムナーの家を燃やしたことでキジムナーの仕返しにあい、命を落としました。

キジムナーとは？

ガシユマルの古木に住み、赤い髪で背丈は人間の子供程度だといわれています。（諸説あり）

\*ひとたびキジムナーに嫌われると、容赦なく人間を殺してしまうのだそう。

沖縄の歌

沖縄の音楽は、琉球だった時代、首里城の中で始まった「琉球古典音楽」と、それ以外の人々が楽しんだ「民謡」に分かれるのだそうです。

一般の人々が広めた民謡は、現在も多くの人々に歌われています。沖縄の民謡は、昔からある曲以外に、次々に新作が生み出されていることが特徴の一つです。

ここで代表的な民謡を一つご紹介いたします。

安里屋ユンタ

竹富島に伝わる歌で、約二百年前の琉球王国の時代のロマンスを歌ったものです。

もちろん、この他にも民謡は数多くあり、まだまだ新しい曲が生み出されるかもしれませんね。